

「ひとりの人間」として 社会に出るといふ経験

早稲田大学人間科学部（学生）

吉川 舞

（よしかわまい）

プロフィール

1985年北海道札幌に生まれる。家族の厚い庇護の下、箱入り娘として育つ。18歳、早稲田大学人間科学部入学と共に上京。東京にて面白い文物・人と触れ合う一方で、世界遺産を見る旅を繰り返す。19歳、大学の授業でカンボジアへ。運命の場所・サンボ・プレイ・クック遺跡群と出会い、遺跡保全を行ったりに関わり続けるためボランティア団体「Ju-Ju」を設立。現在はより深く文化遺産と地域に関わるため、サンボ地域において地域ベースの観光に関連した事業を立ち上げようと奮闘中。

2007年秋、私は突然講演会のパネリストという役割を与えられた。

「ビジネスを変える、社会が変わる」という講演会で、社会の価値観を変えるために起業し、第一線で活躍している起業家たちと共にパネルディスカッションに参加するのである。卒業後の進路に企業を選択せず、自分が惚れ込んだカンボジアの文化遺産周辺で、地域の資源を活かした観光事業を行うために自分で自分の仕事を作ると決めた私にとって、先輩起業家との出会いは刺激になるだろう、とWAVOCが与えてくれた機会であった。

パネリストとして、自分が何を語り、どんな状態になるのか想像が出来ないまま、講演会に向けた準備は進んでいく。何よりも驚いたのはそのテンポの速さであった。これまでも学生が主催する企画に携わる機会は多く、自分自身で開催した経験もある。しかし、企業が中心となつて行うそれは、学生のものとは全く違った。企画も連絡も報告も相談も、速い。一つのことを考えつくのと、すぐに反応が返ってきて、それを実行するための連絡が回り、準備が動き出す。「確認する」という一言をとつても、「聞いてみるね」と同義語の学生のそれとは違い「聞いて、理解して、全うする」という一連のプロ

セスが全て詰まった行為だと痛感した。

講演会の参加者向けに、次の一步に繋がるようなタイアップ企画の立案を求められ、学生スタッフと呼ばれる仲間を組織し頭を捻った。考える時間は短く、そこから生み出す結果には面白さ・新鮮さが求められる。そしてアイデアが通つたら、自分たちだけでなく、自分たちを取り巻く様々な人々や組織がそれに向かって走り出すのが目に見えてわかった。決断の瞬間に、これまではない「重み」を感じた。

そして迎えた講演会当日。主催する企業からシックなスーツに身を固めた社員の方と機材を乗せたトラックがものしく到着した。学生スタッフは揃いのTシャツを着て、もう既に現場で動き始めている。企業人の「お仕事」に当てられたように、学生たちの動きはいつもより機敏で熱気を帯びている。最後の全体ミーティングを終え

る頃には講演会の成功に向かって全員が意識をひとつにする雰囲気が出来上がり、学生スタッフにも高揚感が見て取れた。

妥協のない、創り上げる姿勢。目の前で着々と進行する企業による仕事に、そして仲間たちの真剣な顔に、すでにかなり感動し、進めてきた準備の最終確認をした私の中に、走ってきた日々に対する自信と、安心感が生まれた。

「これできっと大丈夫。企画はきつとうまくいく」。そう思って息をついた瞬間に、初めて、怖くなった。それまで講演会自体や企画の準備に明け暮れ、自分自身に課せられた役割について、ゆつくり考える余裕はなかった。他のすべてに安心したと同時に、「個人」として、パネリストになる自分に対する声にもならない不安が襲ってきた。これまでの準備期間中、私は「学生スタッフ」という集団に属し、一緒に考え、一緒に挑戦する仲間がいた。しかし、講演会が始まり壇上が上がってしまったら、私はひとりになる。相談することはできず、一人の人間として判断

し、その場で発言しなければならぬ。しかも、300人の聴衆の前で……。いつもは履かないヒールの靴と、戦闘服のつもりのスーツがどどんと窮屈になり、その中で身体が固まっていくのが自分でもわかった。その時、普段の私

をよく知る仲間の一人がそと私をつついで、「緊張してる？」と心配そうな目で聞いた。まずい、と思った。

「みんなにもわかってしまう。伝わってしまふ」。いてもたってもいられなくなり、慌ただしくマイクの声が飛び交い、緊張が高まっていく会場を一人で抜け出した。会場外の緑の下で、一人になり深呼吸をした。冷静になると、背伸びをしてもしようがない、今のままの自分を見てもらおうと覚悟が決まり、自然と身体の力が抜けていった。

直前の不安をよそに、講演会の壇上は面白くて仕方がなかった。集まったパネリストの方々が持つパワーを一番近いところでひしひしと感じて、自分の内側から湧き出す言葉があり、自然と口から出てきた。会場にいる参加者とその向こうにずらりと並ぶ学生スタッフたちの気持ちがこちらに向かつて流れてくるのがわかる。相互にかみ合うような不思議な一体感があり、集団から切り離されてしまった個人というよりも、この時までに積み重ねられてきた準備する側の思いと、参加者として今まさに何かを感じている人たちの思いの狭間で、その両方を繋ぐ者としての役割を実感した。「学生スタッフ」というひとつの集団を抜け出した先には、会場全体を巻き込んだより大きな世界が広がっており、その核に近

いところに今自分が存在している、そんな感動があった。そしてもう一つ、パネリストとして同じ舞台上に立った起業家の華やかな姿の向こう側には、それを支えるたくさんの表に出てこない人々がいることを知った。華やかな場に立つ役割を与えられた人間は、企業の中にいる、外からは見えない人の仕事を背負って舞台上に立っている。壇上の社長や起業家たちの存在感にそれを感じ、忘れてはいけない教訓として今も私の中に刻まれている。

後に振り返ると、この講演会を通じて私は2つの怖さを体験した。一つ目は、準備の段階から徐々に感じていた「学生である」という一種の言い訳が通用する世界の外に出て行き、社会に対して責任を持ち、影響を与え、それを追求される存在になることへの怖れ。そしてもう一つは当日会場で感じた、集団から抜け出した「個人」が見られる場へ出て行くことに対する怖れであった。どちらもこれまで自分を守ってくれていた組織や、支えてくれていた人間関係から離れるという事に対する不安と、それに伴って自分自身に求められる責任に対する漠然とした不安からくるものだと思う。学生という立場は学校によってある程度、現実の社会から切り離され、守られている。

そのため、授業を休んでも、単位を取らなくても、それほど社会的に大きな影響を与えるわけでもなく、責任を追及されることもない。いや、実際には先生や大学の事務所、親など学生を取り巻く環境には影響を与えているのだが、それを自覚する機会がほとんどない。しかし、この講演会に向けた準備の中で触れた「企業人」の社会の中で仕事をするという姿勢には、甘えや生半可な態度は通用しない激しさがあった。そしてその姿勢を間近に見ること

で、自分もそれに応えなければと、自然と背中一本筋が通るような気持ちにさせられた。生半可では居られないという怖れが、「社会への責任」というよく言われる概念を真に迫った感覚として私に教えてくれた。さらに、そのような姿勢で向き合った、講演会前日までの準備に明け暮れ仲間たちと走り続けた日々は、怖れだけではなく、普段の生活の範疇にはいない人たちが真剣に関わり合い、何かを生み出そうとする際に発生するエネルギーの渦のようなものを私の感覚のなかに強く残していった。

守られた状況に甘んじているか、それとも守られていることを認識しつつ、うまく利用してその中で実践や失敗を経験できるかは大きな違いであるように思う。様々な庇護を受ける学生とい

う立場から社会に出て、社会の中で生きる個人になるという過程の最後に、大学という機関があるならば、やはり私たちはその場を利用して社会に出るための様々な準備をしておく必要があるだろう。そしてその準備は一朝一夕にできるものではなく、小さな失敗や成功を繰り返していく中で体得し、少しずつ自分たちの次の一歩を固めてくれるものではないだろうか。

私は企業への就職という道を選ばず、自分の想いを形にするため起業という選択をした。次の4月から私は約17年ぶりに、所属する学校という「枕詞」を失う。「早稲田大学」という防壁の外の社会に「吉川 舞」というひとり人間として出て行くことになる。この講演会を通じて経験した怖れはあつとだけのもではなく、これから同じような状況に常に曝され続けていくことになるのだろうか。「社会に出る」というフレーズに付いてくるその責任、その重さ、その怖さ、その面白さ。準備も含めて1ヶ月、めまぐるしい日々は私にとって、社会に出て行く前の小さな洗礼であったように思う。そしてそのひとつひとつに自分でぶつかっていくしかない環境を、学生である期間に与えられたことは、企業という新しいゆりかごを選ばなかった私に

とって必要な経験だったと、今あらためて思う。

働くということに限らず、社会の中で生きていく上では常に判断が求められ、責任がついてくる。働く場としての企業の向こう側に「社会の中で生きる」ということを垣間見られたという点で、私にとってはより大きな世界へと目を向ける重要な機会となった。そしておそらくこのような経験は、私のみにとどまらず、多くの大学生にとっても自分たちが置かれている状況を別な視点から見つめ、それを活かす方法を考える、ひとつの大切なきっかけとなるのだろう。

【注】

1 WAVOCと「ザ・ボディシヨップ」が協働して行った講演会。ビジネスを通して社会を変革する価値観を知ってもらうことをテーマに、ボディシヨップ創業者のアニータ・ロディックのビジネススタイルや価値観を紹介。さらに、起業によってそれまでの価値観に一石を投じた社会起業家を招き、パネルディスカッションを行った。筆者はこのパネルディスカッションに大学卒業後、起業を考えている学生として参加。